

Moodle を用いた実験レポートの Online 相互査読

Online Peer Review of Students' Experiment Reports using Moodle

千葉大学アカデミック・リンク・センター, °山本和貫, 藤本茂雄

Chiba Univ., Academic Link Center, °Kazunuki Yamamoto, Shigeo Fujimoto

E-mail: kazunuki@faculty.chiba-u.jp

1. はじめに

学術論文や研究報告書には、その構成や図表の表示方法などに関して基本的な体裁があり、実験レポートの作成は、それらの基礎を学ぶ重要な機会である。しかしながら、初歩的な体裁さえ整っていない実験レポートに対して、ひとつひとつ手作業で指導・修正を行うことは、大変な労力となっているのが実状である。

そこで我々は、レポート指導の効率化と教育効果の向上を目指して、Moodle のワークショップ・モジュールを利用した学生相互による Online 査読を試みた。ワークショップ・モジュールは、相互評価学習に適したモジュールであり、ルーブリック評価を行える点が大きな特徴である。ルーブリックに評価ポイントが明示されているので、最低限の体裁の確保が期待される。

2. 方法

2.1 レポート査読の実施方法

1つの実験テーマが終了すると、1週間ごとにレポート作成、査読、査読結果をもとにしたレポート修正を行い、計3週間をかけて1つのレポートを完成させた。

2.2 効果の測定方法

査読点の時間的推移及び査読点と教員が採点した最終評価との相関を調べ、教育的効果の評価を行った。また、査読に対する学生の意識について、受講後にアンケートを実施した。

3. 結果と考察

3.1 Moodle による工程の自動化

Moodle によって、査読者のランダム割り当て、査読結果の集計、査読結果の閲覧などの工程をほぼ自動で行うことができた。この自動化によって、これまでは実現不可能だった相互査読が可能になったと言える。

3.2 査読点の推移

査読点の時間的推移をプロットしたところ、全体的に右上がりの傾向がみられた。特に、最初の査読点が低かった学生ほど右上がりの傾向が強く見られた。このことは、最初は完成度の低いレポートしか書くことのできなかった学生に対して、この方法が特に有効であることを示唆している。

4. まとめ

レポート指導の効率化と教育効果向上を目指して、Moodle のワークショップ・モジュールを利用した学生同士による実験レポートの査読を試みた。効率化の観点では、査読者の割り当てや結果の集計等、Moodle の自動化機能を有効に活用することができた。教育効果としては、査読を繰り返すことにより、レポートの質が向上し、特に、授業初期において不十分なレポートしか書けなかった学生にとっては、その効果が高いことが示された。アンケート結果等については当日発表する。